

短歌に登場する自然を表す言葉や動植物ならびに食べ物からみた 斎藤茂吉の自然観について

平 智・秋元彩夏・小早川実奈・結城素子

山形大学農学部
e-mail : staira@tds1.tr.yamagata-u.ac.jp

Mokichi Saitou's View of Nature According to the Words Relating to Nature, Animals, Plants and Foods Appeared in His Tanka

Satoshi TAIRA, Ayaka AKIMOTO, Mina KOBAYAKAWA and Motoko YUKI

Faculty of Agriculture, Yamagata University

Keywords : 動物, 斎藤茂吉, 自然, 植物, 食べ物, 短歌

短歌は、人々の日々の暮らしぶりや心情の細かな変化などを言葉を用いて表現する手段の一つである。その中には詠まれた年代に関わらず、私たちに身近な自然や動植物がしばしば登場する。

著者らはこれまでに、国内外の著名な民話や童話、さらに紀行文や文学作品などに登場する動植物や食べ物と人との関わりについて考察してきた（平ら、2009；2010；2011a,b；2012）。それらの作品に登場する動植物や食べ物には、作者が生まれ育った生活環境や地域の食文化が少なからず影響していることが推察された。

『斎藤茂吉歌集』は、山形県上市出身の歌人である斎藤茂吉の全作品 17,907 首の中から代表的な 1,688 首を収録したものである。作品は岩波書店版『斎藤茂吉全集』により、第一歌集『赤光』以下『あらたま』、『つゆじも』、『遠遊』、『遍歴』、『ともしび』、『たかはら』、『連山』、『石泉』、『白桃』、『暁紅』、『寒雲』、『のほり路』、『霜』、『小園』、『白き山』および『つきかげ』の 17 歌集から選出され、歌集に含まれなかった作品のうちのいくつかが『補遺』として収められている。

本報告では、斎藤茂吉の自然観が自らが詠んだ短歌の中にどのように反映されているかについて、短歌中に表出する自然を表す言葉や動植物ならびに食べ物を通じて考察した。また、短歌が詠まれた年代やその当時の茂吉の暮らしぶりにも着目し、茂吉自身の生活背景が彼の自然観の形成にどのように影響したかについても検討した。

調査方法

『斎藤茂吉歌集』（山口ら、1978）に掲載されている全 1,688 首を調査の対象とした。

まず、作品中に表出する自然を表す言葉、動物、植物ならびに食べ物をすべて抽出し、種類ごとに登場回数を集計した。次に、動物は、哺乳類、鳥類、は虫類、昆虫類およびその他に分類した。植物は、草本、木本およびその他に分類し、さらに、草本および木本を、葉、花、果実およびその他に分類した。食べ物は、野菜、果物、穀類、魚介類およびその他に分類して集計した。

次に、それぞれの作品を含む歌集が発表された年代をもとにして、作品が詠まれた年代を推定し、その年代に茂吉の周囲に起こった出来事を『斎藤茂吉』（西郷、2002）に記載されている年表と照らし合わせて、さまざまに変化する生活背景が茂吉の自然観にどのような影響を及ぼしたかについて考察した。

調査結果と考察

全 1,688 首に登場した自然を表す言葉、動物、植物ならびに食べ物の登場回数は、それぞれ、1,462 回、303 回、383 回および 80 回であった（第 1 図）。

自然を表す言葉の登場回数は、植物や動物に比べて 4～5 倍程度多かった。自然を表す言葉の中でも最も多くを占めたのは、「山」（総称）の 258 回であった（第 1 表）。その中には月山や蔵王の山など、出身地の具体的な山々も多数含まれていた。このことから、茂吉が生まれ育った山形県南村山郡金瓶村（現在の上市市にあたる）が周囲を山に囲まれた自然豊かな土地であったため、幼いころから見てきた山々に最も視線が注がれやすかったのではないかと考えられた。

動物は昆虫類が最も多く、動物全体の 3 分の 1 を占めた（第 2 図）。登場回数が最も多かった言葉は「鳥」（総称）であったが、蛍や蝉など具体的な名称が多く登場する昆虫類の割合の方が上回った。

植物は登場する種類数が最も多かった（第 2 表）。

2013 年 4 月 5 日受付。

人植関係学誌・13(1):23-25, 2013. 資料・報告.

第1表. 『斎藤茂吉歌集』に登場する自然を表す言葉ならびに動植物と食べ物の登場回数と種類.

登場回数	自然を表す言葉	動物
258	「山」*	
104	「雪」*	
103	「日」*	
82	「雨」*、「川」*	
78	「雲」*	
74	「空」*	
71	「光」*	
50	「風」*	
44	「月」*	
38	「水」*、「海」*	
31	「谷」*	
28	「原」*	
27	「波」*	
26	「野」*	
25		「鳥」*
22	砂	
21	「土」*	
20	みつづみ	
17	石、「山峡」*	馬
14	畑	
13		蛙
12	こがらし、霧	牛、蟬、雁
11	霜、雷	
10	水	鯛
9	森、なぎさ	鯉
8		蛭、鴉
7	峰、露、浜、岸、庭	けだもの、猫、蚕、虫
6	うづ潮、虹、田井	蟋蟀、蜻蛉
5	地震、河、山がは、嵐、嶽	蠅
4	星、岡、空気、天、沼、水泡、瀬	鼠、蜂、七面鳥、雉、山鳩
3	池、丘、峠、いつみ、もや、磯、林	犬、狐、ぶと、蚊、蛾、蟻、のみ、おたまじゃくし、鷺、「鷄」*、田螺、やまがし、卵、亀
2	砂浜、霞、ゆぶくれ、天の原、地平、木立、曇り、道	兎、かなかな、うつせみ、虻、まゆ、かまきり、雲雀、鶴、かささぎ、群鳥、にわとり、鷗、魚、鶺鴒
1	夕焼け、潮沫、かい、谷底、夕映、霞、滝、まごご、山路、水たまり、噴火、石道、入江、暗色林、いなびかり、山のべ、スコール、ゆぶぎり、なだれ、みなかみ、あめつち、堅田、田井、地、水脈、平、島、沢、水ぎわ、岩、土ほこり、石だたみ、水柱、山脈、闇、泥、陸、日照り、あられ、砂丘、汀、海へ、坂、平野、陸稲はたけ、田園、小園、胡瓜畑	鹿、黒豹、獅子、駱駝、いとど、蟻地獄、やんま、家鴉、バツタ、孫太郎虫、源五郎虫、昆虫、黄蝶、めんどり、あひる、海雀、アムゼル、うぐひす、白サギ、鴨どり、雁戸、とび、河豚、くちなは、ろ、蛇、鮒、鮎、オトシブミ、竜のおとしこ

登場回数	植物	食べ物
27	葉	
25	「杉」*、草	
19	「木」*	
16		飯
9	「竹」*、羊歯、紅葉、檜	
8	松、花	餅
6	檜、橡、芽、さるすべり、通草**	
5	萱、苔、栗、白頭翁、柿**	
4	もみじ、薄、稻、くみの実、沙羅双樹、葦、落、梅	蜜柑
3	曼珠沙華、唐辛子、橘**、麦、だまきゆきのした、胡桃、椰子**、縦、かえるで、けし	塩、納豆
2	桐、桑、わら、茗荷、酸模、柳、からたち、箒ぐさ、藤、路のとう、蓮、薊、こんじやく、馬酔木、檜、わらび、ぶどう、ブナ、車前草、牡丹、椎	味噌汁、「干し柿」*、麦酒、たこ、肉、粥、鯉、昆布
1	葵、柳、ホウセンカ、紅苳、どくだみ、合歡、つくづくし、胡麻、伽羅、赤茄子、泰山木、サボテン、あららぎ、花粉、ほぼつき、リンデン、ダリア、向日葵、さんご樹、漆、樺、林檎、梨**、糖大根、葎、梅糖の実、杏、なつめ**、いちよう**薄荷、木賊、木瓜、ざさげ、菟豆、松葉牡丹、穂、はしばみ、擬宝珠、萩、あらくさ、すみれ花、バラ**、花茎、わだつみ、ソロの木、枝、ゆづり葉、菱、柘榴、柏、茅がや、オリヴ、そばがら、くさくさの実、箒ぐさの実、またたびの実、木の实、かしの実、大栗の実、万年青の実、射干の実、またたび、馬鈴薯、そば、ひま、山茶花、大根、百日紅、秋ぐさ、河骨、凌ぜん花、山桜、虎杖、桂、松樹、桜桃	梅、米、じゅん菜、笹竹、きのこ汁、胡桃、蕎麦、水、モツカ、レモン、黒貝、きのこ、沢庵、卵のから、魚、塩漬、酒、百合の実、白桃(112) 140(1.25) 20(0.18) 18(0.16) 0 7(0.06) 豆、白桃、ハム、苳、胡瓜、銀杏、葎、甘藷のつる、黄菊、香の物、鮭のはららこ

* : 「」は総称を示すものとして表出しているもの。
** : 果実または実を表すものを含む。

内訳としては、草本よりも「杉」や「木」(共に総称)のような木本の方が多かった(第3図)。さらに植物全体を部位別に分けて見ると、「葉」と「花」の登場回数がほぼ同じであった(第4図)。一方、植物は登場した種類数の多さに対してそれぞれの登場回数はあまり多くなく、茂吉が日頃から目にする多数の植物に興味を持っていたことが示唆された。

食べ物については、「飯」や「餅」といった穀類が多く登場した(第5図)。30代半ばおよび晩年には病床についていたためか、「飯」の他にも「納豆」や「味噌汁」といった植物由来の食べ物が多い傾向が見られた。

以上に述べたような傾向は、17ある歌集間で比較しても大きな差異は認められなかった(第3表)ことから、茂吉の自然に向き合う姿勢はその生涯を通じてほぼ一貫したものであったと思われる。一方で、茂吉の生涯は小学校卒業後の上京やヨーロッパ留学、太平洋戦争など生活環境が大きく変化し続けた。病床にいた期間や海外で生活していた時期に作られた作品の中に故郷の自然を表す言葉を含むような望郷の歌がないかどうか調査したが、そのような作品はとくに見つからなかった。このように茂吉は激動の人生を歩んだが、今回の調査結果から茂吉の自然観は年代、場所ならびに生活背景にあまり大きく左右されることなく、その生涯を通じて大変安定したものであったと考えられた。

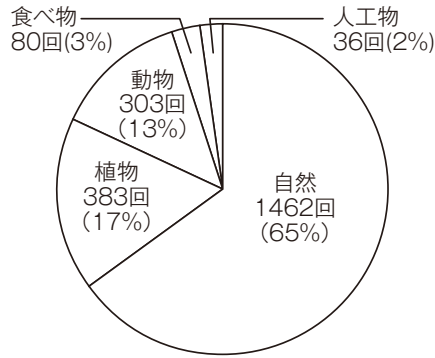
第2表. 『斎藤茂吉歌集』に登場する自然を表す言葉ならびに動植物と食べ物の種類数.

項目	種類数
自然を表す言葉	112
動物	79
植物	137
食べ物	42

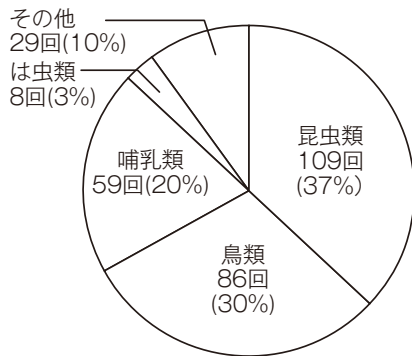
第3表. 『斎藤茂吉歌集』に登場する自然を表す言葉ならびに動植物と人工物および食べ物の歌集ごとの登場回数.

歌集名(収録歌数)	自然を表す言葉	動物	植物	人工物	食べ物
赤光(159)	92(0.58)*	40(0.25)	52(0.32)	6(0.03)	8(0.05)
あらたま(136)	102(0.75)	42(0.30)	29(0.21)	6(0.04)	6(0.04)
つゆじも(77)	78(1.01)	16(0.20)	18(0.23)	0	4(0.05)
遠遊(58)	60(1.03)	15(0.26)	16(0.28)	2(0.03)	2(0.03)
遍歴(79)	90(1.14)	8(0.10)	13(0.16)	3(0.04)	8(0.10)
ともしび(116)	111(0.96)	19(0.16)	19(0.16)	0	7(0.06)
たかはら(76)	80(1.05)	13(0.17)	11(0.14)	0	2(0.03)
連山(61)	67(1.10)	11(0.18)	10(0.16)	0	1(0.02)
石泉(115)	100(0.87)	18(0.16)	21(0.18)	4(0.03)	5(0.04)
白桃(112)	140(1.25)	20(0.18)	18(0.16)	0	7(0.06)
暁紅(111)	123(1.11)	14(0.13)	30(0.27)	0	4(0.04)
寒雲(110)	76(0.69)	13(0.12)	31(0.28)	3(0.03)	5(0.05)
のぼり路(55)	70(1.27)	6(0.11)	11(0.20)	0	1(0.02)
霜(56)	48(0.86)	13(0.23)	22(0.39)	3(0.05)	3(0.05)
小園(99)	83(0.83)	12(0.12)	41(0.41)	5(0.05)	5(0.05)
白き山(142)	127(0.89)	24(0.17)	16(0.11)	2(0.01)	6(0.04)
つきかげ(119)	33(0.28)	19(0.16)	18(0.15)	2(0.02)	6(0.05)

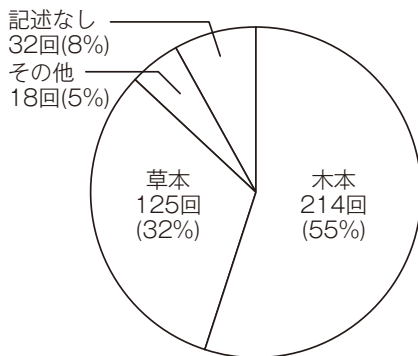
* : 1歌あたりの登場回数.



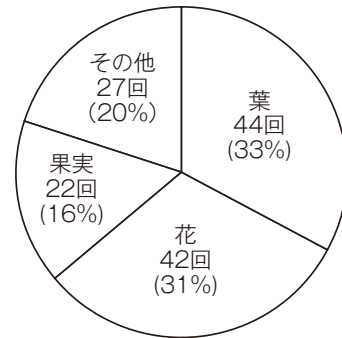
第1図. 『斎藤茂吉歌集』に登場する自然を表す言葉ならびに動植物、人工物および食べ物が登場する回数。()は割合を示す。人工物とは、田や畑など人工的に作られたものを指す。



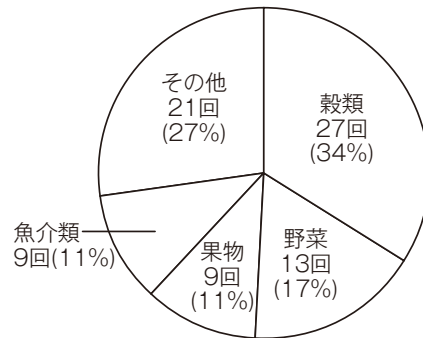
第2図. 『斎藤茂吉歌集』に登場する動物の種類と登場回数の割合。()は割合を示す。



第3図. 『斎藤茂吉歌集』に登場する植物の種類の種類と登場回数の割合。()は割合を示す。



第4図. 『斎藤茂吉歌集』に登場する植物の部位と登場回数。()は割合を示す。部位が記載されているもののみを分類した。



第5図. 『斎藤茂吉歌集』に登場する食べ物の種類と登場回数の割合。()は割合を示す。

引用文献

- 西郷信綱. 2002. 斎藤茂吉. 朝日新聞社. 東京.
- 平 智・川野美保・山口雪恵・小岩井優・宮沢喜一. 2009. 日本民話やグリムおよびアンデルセン童話に登場する果実や野菜をはじめとする食物について. 農業および園芸 84:715-722.
- 平 智・村岡 翼・渡邊菜穂子・木村正勝・小林恵美・奥山忠洋. 2010. 藤沢周平の作品に登場する果物と野菜をはじめとする食べ物について. 人植関係学誌. 10(1):35-37.
- 平 智・今井健治・小笠原千晶・菅井元基・匹田直宏・深澤美幸. 2011a. 『おくのほそ道』に登場する動植物について. 人植関係学誌. 11(1):17-19.
- 平 智・北原裕理・原理恵子・村岡睦美. 2011b. 宮沢賢治の童話作品に登場する植物について. 人植関係学誌. 11(2):15-17.
- 平 智・木村直道・佐藤祐樹. 2012. 『遠野物語』および『遠野物語拾遺』に登場する植物と食べ物について. 人植関係学誌. 12(1):25-28.
- 山口茂吉・柴生田稔・佐藤佐太郎. 1978. 斎藤茂吉歌集. 岩波文庫. 東京.

